



寛文12年三井高利自筆「万覚帳」

口 絵 寛文一二年三井高利自筆「万覚帳」

右上が表表紙、左上が裏表紙、下が七七丁裏・七八丁表（本号二一九頁所載）を開いたところ。

表表紙・裏表紙の下方には、竹もしくは木の薄い板が中に貼り込まれていることによる出っ張りがみえている。補強の措置であろうか。

江戸の長兄の店で働いていた三井高利は、慶安二年（一六四九）松坂に帰り、江戸に自分の店を出すという大望を抱きつつ、松坂において領主、近隣村々を相手に金融事業を営み資金を蓄積、その機会を待った。延宝元年（一六七三）、商人として成長した子供達とともに、念願だった江戸に呉服店を開いた。口絵の「万覚帳」は、「万借帳」とともに、現存する三井家の一次史料としては、最古のものの一つであり、創業前後の高利の金融活動を示す貴重な史料である。全一三〇丁のうち、墨付き箇所は二〇丁しかなく、長期にわたり使うつもりで作られたが、延宝七年まで使用された後は、呉服事業の発展とともに、必要がなくなっただけと思われる。

なお「万借帳」の写真は、『三井銀行八十年史』（一九五七年）に掲載されている。

「万借帳」および「万覚帳」に関する詳細は、本号掲載の史料紹介「寛文一二年三井高利自筆「万借帳」・「万覚帳」を参照されたい。

（樋口知子）